

第三章 健康と資本主義

神の人間化

一生のうちの今日一日、今の時間をどう生きるか。どう呼吸するか。人間ひとりひとりがまじめにそう想っていく。そこに悦びがあります。

わたしは神という認識を人間化します。

神とは理想の人間の想定です。わたしはそう考えます。世界のひとりひとりとはみな、神、

すなわち理想の人間の想定に向い死ぬまで学び続ける過程にあります。わたしはそう考えます。

恋愛指導の神、保育の神、教育の神、保健の神、看護の神、医療の神。これらは家庭支援の神です。販売の神、仕入しゅうにんの神、生産の神、経営の神。これらは商品提供の神です。政治の神もあります。みなさんはどういう神を想定しますか。すなわちどついう理想の人間をめざしますか。

各分野の神の想定は、生物系の進化と人間社会の伝統に学び、各分野の最高級の人間の現実に学びます。そうして未来の現実を予感します。

わたしも世界の部分しかみていない人間です。無限の世界を認識しつくすことは無理です。そうして生きることが人間のおもしろさです。未知を既知にしていく悦びです。

なお、あのオウム真理教は、健康と平和のためにこそあるヨガ（原始的な修業）を正

しく理解せず、ヨガのイメージを、現代科学的な暴動により、深く傷つけたという、大罪をおかしました。

わたしは未来の人間社会を尊敬します。わたしたちは人間社会を、闘争社会から調和社会へ、再編していきます。

わたしは体内と世界の必然を追究します。わたしは人間ひとりひとりが体内と世界の必然を追究していくように望みます。必然の認識がほんとうの自由です。

健康の本質と商い

生活環境（自然環境と社会環境）の変化の波に調和し安定することをくりかえす。そういう、本能的に調和した理性を開拓する。生活環境の変化の波をまともに受け入れ、苦しみ悩みやすく（病みやすく）、楽しみ悟りやすい（治りやすい）、そういう自然な波のある生体と認識に鍛錬していく。これが、人間の生体防御系を支援することです。これが、健

康の本質です。

わたしたちは、日本と世界のお店と商品の奥にある生活観や人生観や社会観を推理し、わたしたちの生活観や人生観や社会観と比較していきます。日本と世界のお店と商品を尊敬して深く学びつつ、わたしたちの商品（教科書と研究用品）とお店（研究茶室）を創っていきます。商いの知恵を総合していきます。ただし、健康生活と平和社会のためにです。わたしたちは、お客さまの生活（休養生活

と労働生活)の各場面を想定し、お客さまの感覚(視覚 聴覚 嗅覚 触覚 味覚 体内感覚)と表象と概念を総合的に満足させられるよう、工夫していきます。

資本主義の問題

資本主義は、現金と預金が先進国に偏ってしまうことが問題です。貧民の健康生活のための寄付ということが、必要であり、必然です。問題は、貧民の健康生活のために確実に

活用されるという寄付の手続き、そういう寄付の信用システムが、開拓されていないことです。現金と預金というものは、健康生活のためにも病的生活のためにも、平和社会のためにも戦争社会のためにも、使えるところに、問題があります。貧民の健康生活、ひいては平和社会のために確実に活用されるという、寄付の信用をどう開拓するか。

一方、企業というものは、自社の商品を買ってくださるお客さまがいないと、存続しま

せん。つまり、有効な需要がないと、存続しません。このことを中心に唱えたのが、ケインズです。

ケインズは、このことに対応するために、税金と国家事業をしよう、唱えました。税金というものは、国民からの強制的な寄付です。国家事業は、国家が救いたい企業と労働者のために、何らかの事業を考案し、国家がお客さまになることです。支払いは、国民から強制的に寄付させた、税金を使います。

しかし、こういうケインズ政策は、戦争社会のための国家事業を考案する傾向にあります。第一章の中にも書いたよう、国家というものは、もともと、世界的な民族闘争の結果として在る制度です。

国家を超え、人間社会全体として、企業のために有効な需要ということ、考えてみましょう。

明らかなのは、貧民の健康生活のための事業はいくらでも考案できる。しかし、そのた

めに確実に活用されるという、寄付の信用が開拓されていません。つまり、先の問題にもどります。

ICカード案

わたしたちは、JOMONあかでみい関連でしか使えない、ICカードを創ることを、予定しています。ICカードの名称は、X(未定)です。

次に、健康生活と平和社会への意欲と素質

のある、日本と世界の貧民を厳正審査します。合格した貧民に、ICカードXを寄付します。特待貧民のICカードXへの、使用可能額設定は、どうするか。

株式会社Y(平和教育企画室)とは別に、NPO健康生活基金(仮称)を設けます。株式会社Yによる審査に合格した、特待貧民は、ICカードXの定期的な使用可能額(寄付額)設定について、NPO健康生活基金(仮称)と契約します。

こうして、貧民の健康生活、ひいては平和社会のために確実に活用されるという、NPO健康生活基金(仮称)の信用を確立します。この制度と電子システムを構築した上で、NPO健康生活基金(仮称)は、日本と世界の富裕層から寄付金を募ります。わたしたちは、原則として国家の税金を使わない、いわば世界的な、脱国家的な公共事業までを予定しています。

ひとつの要点は、寄付金を株式会社Yが直

接、受け取らないことです。特待貧民のICカードXの使用可能額のうち、実際に使用した額のみが、NPO健康生活基金(仮称)から株式会社Yへ送金されます。株式会社Yは、特待貧民というお客さまに買っていただけ、ホームページ課金情報、商品、イベント、チェンストア、関連活動を考案し続けます。そういう商業経営の努力がないと、寄付金に対する怠慢と腐敗が生じます。

わたしたちの平和教育商業経営システムを

自由に批評していただき、システムの改善・改革・コーディネートとの参考とさせていただきます。公のコミュニケーションのしくみも、予定しています。

人間はそもそも、自分の労働力を養うために必要な、他人の労働の量より多く、自分の労働の量を提供できます。

今は、これから余る労働の量が、先進国に偏る現金や預金の額として公に記録されています。そういう社会関係になっています。そ

して、現金や預金が、病的生活や戦争社会のために使われる傾向にあります。

これから余る労働の量を、現金や預金を、健康生活や平和社会のためだけに使う、平和教育商業経営信用寄付システムの開拓。これのみにより、資本主義の問題が本質的に解決します。あのマルクスにも、残念ながら、富裕層の資産を暴力的に奪還するかのような情念が、残っていたかもしれませぬ。正しい道は、寄付という金融の信用を確立することで

す。

先に書いたように、商業経営の努力は大切です。市場制度は必要です。そこに信用ある寄付を組み込んだ、寄付込市場制度を、わたしは提唱します。

たとえばイギリスや日本など先進国は、富裕な老人が増えています。富裕な老人にとり、老後の楽しみは、学問消費、芸術消費、親族次世代や世界貧民への意義ある寄付、ではないでしょうか。



子どもたち

(撮影・フリージャーナリスト諏訪 勝氏)